

『とろっか、とろっか』

伊地知克介

登場人物（男10人、女5人）

2012年

姉川樹一郎 写真館経営者。六代目。

花 写真館のスタッフ

姉川草二郎 樹一郎の弟

東芽衣 花の高校時代からの友人で元職場の同僚

榎田 信用金庫の職員

東なつめ 芽衣の母 元教員

東万作 芽衣の父 元教員でまちの合唱団の指導者

藤谷 写真館の客 裁判官

かあさんおばけ 幻影（花にしか見えない）

1867年

姉川松一郎 初代の写真館主

三木小太郎 武士

枝野重次郎 武士

2006年

姉川竹一郎 五代目の写真館主

1979年

若者1

若者2

若者3

舞台は地方都市の駅前商店街のはずれにある「姉川写真館」。

時代は2012年をベースに、幕末の一時期（1867年ごろ）と、昭和の一時期（1980年ごろ）、5年前（2006年）を行き来する。

古い写真館。洋館を建て増したり、改装している。壁には写真が並べられている。写真を置いて検討するための作業台があり、その上にパソコンやレンズなど、写真館で使う小道具がまとめて置かれている。パソコンにはインターネット電話（スカイプ）で使う、ヘッドホンセットと小型カメラが取り付けられている。舞台中央奥に記念撮影をするときに使う白いスクリーンが取り付けてある。出入り口に近いところに背の高い洋服・帽子かけがあり、その一部に車のキーを引っ掛けられるようになっている。

客入れの間中、床を掃除ロボット「ルンバ」が静かに動いている。いったん暗転。

*（写真館の場所についての設定）この写真館は駅前から続く長い商店街の一番駅から遠い地点にある。このため、駅から歩いてきた客は、スタッフが駅まで車で送ることが多い。出張撮影をすることもあるため、店所有の車が近くに停めてある。

第1場・春

照明が入ると、舞台では樹一郎、草二郎がいすに座り、花が立って説明している。ルンバは足元で止まっている。

花

ようこそ、「姉川写真館」へ。この写真館は全国で現在も営業を続けている中で、もっとも古い写真館の一つです。創業は1866年、実に江戸時代にさかのぼります。初代写真館主の姉川松一郎さんは、もともと武士でしたが、欧米の写真館という存在を知り、日本でも人気が出るのではないかと、この場所で営業を始めました。まさに日本の写真館の草分けの一人と言えます。（壁に並べられた5枚の写真の中で左端の写真を指し）これが姉川松一郎さんです。コスプレをしているのではなく、彼は本当に侍だったので、侍のくさうで写っています。この2人の武士の写真（壁に飾られた武士の写真を差し）は、この写真館で撮影された中で、現在も残っているもっとも古い写真です。松一郎さんが撮影したのですが、この2人が誰なのかは分かっていません。彼の撮影した写真の中で、これだけがなぜ写真館に残っていたかも不明です。当時の記念写真は1人で写すか、あるいは大勢で撮影する

ことが多く、武士のツーショット写真というのは非常に珍しいそうです。二代目の葉一郎さん、三代目の柳一郎さん、四代目の茂一郎さん、五代目の竹一郎さんです。彼らは仮装、今でいうコスプレをしています。40歳の誕生日に、必ず仮装して写真撮るというしきたりになっていたそうです。扮しているのは、それぞれ、ルイ14世、ウイリアム・シェイクスピア、エルビス・プレスリー、森光子さんです。現在の当主である六代目の樹一郎さんだけは、まだ写真がありません。二代目の葉一郎さんは奇抜な記念写真を撮ることで知られました。今はこの壁に台座しか残っていませんが、(差す)かつては、ここに大きな翼を広げた鶴のオブジェがありました。訪れた人はこの鶴に乗って、大空を飛んでいる様子を撮影したそうです。三代目の柳一郎さんは写真館経営だけでなく、さまざまジャンル写真撮影に臨み、数々の賞を取っています。こちらに(客席側を指して)大きく引き伸ばして張られているのは、昭和初期の写真コンテストで賞を取った彼の代表作です。タイトルは、えーっと……。

草二郎 「劇場に来た観客たち」

花 そう、「劇場に来た観客たち」です。実際に行われた舞台劇で、役者に交じってステージに上がり、舞台上から小道具に仕込んだカメラで撮影したと言われています。ユニークな撮影方法と作品は当時、話題になったそうです。四代目、五代目の写真館主も、遊び心にあふれた写真館の経営と、写真に対する研究熱心で、多くのファンを獲得して、今に至ります。写真館の名前は最初は「姉川撮影局」。後に「姉川写真館」となりました。

みなさん、せっかくいらしたので、記念撮影はいかがでしょう。有料になります。希望の方は、私までお声がけください。本日は、ありがとうございました。

草二郎 (間) 兄貴。

樹一郎 (間) ダメだな。

花 ダメですかあ。

草二郎 兄貴、花ちゃんも一生懸命考えてくれたんだし。

樹一郎 そもそも、観光客はこんな写真館には来ないよ。江戸時代のままの建物なら別だ。ここは変に広いだけで、見てくれは普通の写真館だから、観光ツアーのコーズに入れるのは無理だろ。(花に)それに、おまえのガイドはいいかげんすぎるぞ。二代目が仮装するのはフランスの王様かどうか分からないって言っただろ。記録がないんだ。(立ち去りかけて振り返り)おまえは写真館のスタッフだ。おれを「六代目の樹一郎さん」はダメだろ。呼び捨てじゃないと。社会常識を持って。

花 すみません。

樹一郎 きのうは携帯に出なかったし。

花 寝てるとき、切ってるから。

樹一郎 親の顔が見たいよ。

草二郎 兄貴。

樹一郎 なんだ？親のいないやつに、親の顔が見たいといっちゃ、ダメなのか。

樹一郎、立ち去る。

草二郎 花ちゃん、落ち込むなよ。

花 ありがとうございます。

草二郎 兄貴は、頭が古いんだ。花ちゃんの発想は面白いと思うよ。おれ、（胸を指さして）ここにガガガガガガって、きたよ。花ちゃん、観光協会にいただけのことはあるよ。

花 みんなが写真館に来たがるようになる方法、他にないですかね。

樹一郎、カメラのレンズを持って再び登場。

樹一郎 ないよ。

草二郎 兄貴。

樹一郎 今は、みんなカメラ持つてるからな。こんな小さなまちに写真館、いらないんだよ。人も減ってるし。

草二郎 そこを何とかできないか、花ちゃんが考えてくれてるんじゃないか。よく考えてると思うよ。おれ、ここにガガガガガガって、きたよ。

樹一郎 音でしゃべるな。（花に）余計なお世話だ。客にため口きくようなやつが、余計なことを考えるな。

花 友だちだったんです。

樹一郎 友だちだろうが、客には敬語だ。（草二郎にレンズを渡し）このレンズでよかったか？

草二郎 これだよ。ありがとうございます。助かるよ。

樹一郎 返せよ。

草二郎 分かってるよ。

樹一郎 （花に）上でカメラ修理してるから、客が来たら呼んでくれ。藤谷さん、まだ来てないよな。

花 まだですね。

樹一郎 来たらすぐ呼んでくれ。なんで暗い顔をしているんだ。

だれか死んだのか。もう少しましな顔をしろ。客商売だぞ。

樹一郎、再び去る。

花 自分だって、愛想がいい方じゃないわ。

草二郎 子どもの客が入ってくるなり、泣くんだよ。兄貴の顔が怖すぎて。さすがにシヨックなんだって。ああ見えて、子ども好きなんだ。

花 そうなんですね。

草二郎 秋祭りで赤ちゃん相撲があるの、知ってる？

花 あ、神社の境内で。先に泣いた方が負けってやつ。

草二郎 そうそう。あれもさ、兄貴が写真撮ろうと近づくと、必ずそっち側の赤ちゃんが泣くん。神社に文句言われてさ。へこんでたよ。

花 草二郎さん、そのレンズで何の写真を撮るんですか？

草二郎 アネハヅル。

花 何それ。

草二郎 ため口。

花 ああ、だめだめ。また師匠に怒られる。

草二郎 渡り鳥だよ。ヒマラヤの山々の上を越えて、渡っていくんだ。それこそ、ドドドドドドドって数でさ、隊列を組んでね。ネパールでその様子を撮影するプロジェクトがあるんだ。

花 すごい。鳥が専門なんですよ。

草二郎 魚とか、鯨も撮るよ。

花 生き物の写真って、好きです。

草二郎 おれは普通の写真では、一生兄貴に勝てないからね。

花 うちの師匠って、そんなにすごいんですか。

草二郎 この間、空港で会ったフランス人に言われたんだ。おまえはバグダッドのあのアネガワか？ノン、ムッシュー、おれはその弟だ、というとね、握手しようぜ。おまえの兄貴はサムライだって。(短い間)親父が死んで、写真館を継いだから、兄貴の写真家としてのキャリアはこの5年間、止まっている。いらつきもするさ。

花 いつもいらっているわけじゃないんです。優しい時もあるんですよ。羊羹くれたりとか。その後で、変な食べ方するなって怒るんだけど。

草二郎 ま、見捨てないでやってくれ。

花 そんなことしないさ。

草二郎 ため口。

花 ああ。

芽衣、写真館の入り口から姿を見せる。

芽衣 すごい桜ねえ。いつ見ても、感動するわ。

草二郎 あ、いらっしやい。

花 芽衣！そうだ、客には敬語。いらっしやいませ。

芽衣 あ、私、お客さんじゃないよ。

花 じゃ、なんできたのよ。

草二郎 座ってもらったら。

花 ああ、芽衣。この人は店長の弟さん。草二郎さんも写真家なの。

芽衣 戦争行くんだ。

草二郎 僕は戦場写真は。怖いよね、やっぱり。

花 芽衣とは観光協会と一緒に働いてたんです。学校も一緒に。

芽衣 東です。よろしくお願いします。

草二郎 あ、じゃ、東先生の娘さん？

芽衣 そうです。今おっしゃった東は、父ですか、母ですか？

草二郎 お父さまです。僕いっとき、合唱部入ってたからよく知ってる。お母さまはたしか

兄貴の担任だったと聞いてきます。

芽衣 そういうご兄弟多くて。

花 小さなまちだから。

芽衣 花、観光協会、大変なことになってるのよ。めちゃくちゃ忙しくなっちゃって。

花 あ、ゆるキャラが人気出たんだよね。

芽衣 「あかにゃんこ」 「くろにゃんこ」 引っ張りだこだよ。

花 「あかにゃんこ」 「くろにゃんこ」、私が考えたんだよ。

芽衣 アイデアはよかったんだけど、人手不足になっちゃって。着ぐるみ着て踊ってくれる人がいなくて困ってるのよ。あたしも、家のことがあるから、休みとらなきゃいけないことも多くなってきた。

花 芽衣ママ、相当悪いの？

芽衣 （うなずく）それでき。

藤谷、登場。

藤谷 すごい桜ねえ。いつ見ても感動するわ。

花 いらっしやいませ。

藤谷 あ、花ちゃん。店長いる？

花 おられますよ、でない。この場合は……。おります。お待ちになって、でない、待っておりました。

草二郎 正解。

花 呼んできます。（退場）

芽衣 藤谷さん。ですよね。

藤谷　　そうですが……。

芽衣　やっぱり、そうだ。普通のかっこうされてるんで、わかんなかった。こないだ、観光パンフレットのことでお邪魔しました。

藤谷　　あ、観光協会の。

芽衣　ええ。こないだはお手数をかけまして。

藤谷　いえいえ。うちを観光パンフレットに載せるって話したら、みんなびっくりしてたわよ。確かにれんができて、今ごろは桜もきれいよ、ここほどじゃないけどね。でもうちは、観光客がお弁当持ってきて来るところじゃないわよねえ。

芽衣　きょうはお写真を撮られるんですか？

藤谷　（あわてる）いや、写真を撮るわけじゃないのよ。そうね。職務上のことは外で話せなくて。裁判官って嫌ね。

芽衣　ああ、ごめんなさい。

藤谷　　いいのよ。

花と樹一郎戻る。

樹一郎　いらっしやい。あれ。

芽衣　お邪魔してます。私はちょっと、花に話があつて。

樹一郎　外で話してきたらどうか。

花　　そんな、勤務時間中。

樹一郎　いいよ。「ブラジル」でコーヒーのんでこい。今ごろなら、すいてるし。

草二郎　あそこ込んでる時間帯なんかないよ。

樹一郎　お前も一緒に駆け。

草二郎　おれも？

芽衣　　あ、じゃあ、一緒に。

草二郎　ええ？なんか男子がひとり交じるのも変だね。

3人、去る。樹一郎、3人が出て行く様子をうかがう。

藤谷　　できた？

樹一郎　（うなずいて写真を取り出し、テーブルに置く）

間

藤谷　　ダメね。

樹一郎　ダメですかあ。

藤谷 なんてきれいに撮れないかな。

樹一郎 きれいに撮れてます。

藤谷 あたしの一生の問題なんだからね、真剣に撮って。

樹一郎 真剣に撮ってます。

藤谷 姉川腕が悪いのか。あれか、日本人撮るのは苦手か。

樹一郎 ひどいな。

藤谷 知らない人に頼みにくくて、幼馴染に頼んだのが悪かったか。うーん。もう1回撮るか。次は、カジュアルウェアのほうがいいかな。

樹一郎 何回撮り直したら気がすむんですか。お見合い写真の撮り直しなんて……。

藤谷 声大きい。

樹一郎 大丈夫です。壁厚いから。

藤谷 私も年だし、チャンスはもうそんなにないんだからね。裁判官って、出会いが少な
いんだから。転勤も多いし。

樹一郎 まだ大丈夫。

藤谷 姉川、私を他の男に取られるのが嫌で、わざと下手に撮ってない？

樹一郎 そんな。

藤谷 それならそうと、はっきり言いなさい。

樹一郎 いやおれなんか。

藤谷 とにかく、次に失敗したら責任とってもらうからね。同級生でまだ独身なの、あた
しと姉川くらいだからね。

樹一郎 失敗だなんて。あ、これはこれで持って帰ってもらえませんかね。

藤谷 (にらむ) クイズ。あなたの前に、きれいに撮れていないお見合い写真があります。
さて、これを活用する方法はあるでしょうか？

樹一郎 (考える) ツイッターとか？

藤谷 私、何をつぶやくわけ？きょうの判決、懲役2年にしたけど、1年6月でよかった
かなあ、ちよっときつすぎたかなー、とか？花ちゃんたちが戻ってこないうちに、
早くシュレッダーにかけて。

花 戻りました。

花、芽衣、草二郎が戻る。藤谷、写真を3人に見せないようにひったくる。

樹一郎 早いな。

芽衣 怒らないでよ、花。

花 簡単に友達に頼らないでよ。

芽衣 本当に人手不足なのよ。

花 他で探してよ。

樹一郎 ブラジル、行かなかったのか？

草二郎 いや、この2人がさ。

芽衣 ごめんなさい。店長さん。花に、観光協会に戻ってほしいんです。私、それを頼みに来たんです。

花 無理だって。ここのスタッフあたししかいないし。

芽衣 スタッフいないじゃん。みんな言ってるよ。花がここ来る前は店長さん1人でやってたし。店長さん、どうですか。スタッフいますか。

樹一郎 知らない。

草二郎 えー。

樹一郎 うちは別にいいよ。

草二郎 兄貴、なんてこと言うんだよ。

芽衣 (樹一郎に) ありがとうございます。

花 師匠、お願いです。

樹一郎 こんなつぶれかけの写真館に長いこといてもなあ。

藤谷 つぶれかけなの？

草二郎 老舗が安定しているとは限りませんよ。

花 150年続いているんですよ。この店は、ずっとまちの中心だったんです。芽衣、覚えてる？観光協会で冊子作ったでしょ。まちの歴史が5分で分かるってやつ。集まった写真はほとんど全部、この人たちが(壁にかかった歴代店主を指して)撮ってた。つぶしちゃだめなのよ。

芽衣 このまちは、つぶしちゃだめなものが、どんどんつぶれていってる。

花 市民ホールと一緒じゃないで。

草二郎 え、市民ホールなくなっちゃったんだ。

藤谷 反対運動とかあったみたいだけだね。

芽衣 今、市がいろんなものをリストラしてるんですよ。父は怒ってます。

草二郎 そうだろうな。東先生、きっとガガガガって怒るね、絶対。

樹一郎 音でしゃべるな。

芽衣 学校の合唱部はいいんだけど、まちの合唱団は発表の場がなくて。

樹一郎 (花に) いっなくなるか分からないぞ、この店も。

花 そんな。

樹一郎 閉店時間だ。

藤谷 じゃ、私は。次の日程については、また電話しますね。

樹一郎 (藤谷が握り締めている写真を指差し) 結局、持って帰るんですか。

藤谷 必要になるかもしれないので。(他の人物に分からないように「あかんべ」をして、去る)

草二郎 兄貴、おれもこれで。

樹一郎 ネパールはいつからだ。

草二郎 秋になると思う。また報告するよ(去る)。

芽衣 店長さん、いろいろすみません。

樹一郎 東先生、具合はどうですか。

芽衣 あまりよくなって。

樹一郎 一度お見舞いに行くかな。

花 芽衣、駅まで送る。

芽衣 いいのに。

樹一郎 行って来い。あ、花。

花 はい。

樹一郎 さっきロッカーで携帯鳴ってたぞ。

花 かあさんおぼけだ。

かあさんおぼけ、携帯を手に登場する。花にしが見えない。

芽衣 花。

樹一郎 おまえの母親は死んだんだろ。変なこと言うな。

花 ごめんなさい。変なこと言いました。行ってきます。

樹一郎 (首をかしげながら、「ルンバ」を手に取り、スイッチを入れて足元に置く)

花、出口のところで帽子掛けにかけられている車のキーをジャンプして取り、芽衣を連れて、去る。かあさんおぼけも別の方向に退場する。樹一郎は「鶴の台座」に腰を下ろし、壁の写真を見ながら思いにふける。抜刀した三木が駆け込んでくる。その後(二刀流なので)両手に刀を持った枝野が続く。二人、構える。

三木 命が惜しくなったのか、貴様。不意打ちとは、ひきょうな。

にらみあう。

枝野 刀を抜くのも久しぶりでござるのう。(枝野、笑い出す)冗談だ。

三木 まぎらわしい冗談をいたすな。こんなときに。

枝野 正々堂々といたそう。

三木 もちろんだ。武士らしく、正々堂々とな。

初代店主の松一郎登場

松一郎 おまえら何やってんだ。こんなところで刀を抜くんじゃねえ。

三木 これは姉川殿。

枝野 失礼をいたしました。少し、ふざけておつてな。

松一郎 けが人が出たらどうするんだ。そんなものしまえ。

二人、刀をおさめる。三木、窓の外に目をやる。

三木 しかし見事な桜だな。いつ見てもよいものであるな。

枝野 さよう、これほどのものは我が城下でも、なかなかお目にかかれぬ。

松一郎 花見に来たのかい。

三木 姉川殿、きょうは写真を写してもらえぬかと考えてな。

枝野 姉川殿。われら2人で写るということはできるものだろうか。

松一郎 姉川殿はやめてくれ。もう武士じゃねえんだ。

枝野 これはご無礼を。

松一郎 そうかしこまらねえでくれよ。今はただの写真屋のおやじだ。2人で写せるよ。この間、試してみたら9人までできた。

三木 9人

枝野 ナイン。

松一郎 なんだ。

三木 枝野も、姉川殿同様、これからの時代を読んでな。異人たちとのやりとりを自らやろうと、言葉を学び始めておるのだ。

松一郎 ほう、オランダ語か。

枝野 これからはエゲレス語とみてな。

松一郎 それはいい読みだ。

枝野 しかし若いものにはいかん。数は10まで覚えた。ワン、ツー、スリー、フォー、ファイブ、シックス、エイト、ナイン、テン。なんか抜けたな。

松一郎 なにか足りないな。今、九つしかなかった。

枝野 あとは、ハロウ、グッバイ、イエス、ノウ。まだこの程度だ。

三木 して、意味は？

枝野 やあ、さらば、さよう、いや。だったかな。

三木 頼りないな。それでは異人たちとの話し合いの場には出られんぞ。和平のはずが、戦になりかねん。

3人、笑う。

三木 しかし惜しいの。姉川殿はわが藩でも飛びぬけて先が読めるとされた切れ者。これ

から戦になれば、その知恵、役に立ったであろうに。

松一郎 バカ言え。これからはあれよ、ドカンドカン、ドーン、バタバタッ。

三木 音でしゃべるのはやめられよ。

枝野 たしかに大砲、鉄砲の時代よの。

三木 先が読めるということは、これからの武士に役に立たないことだ、と、そう読んだのであるな。

3人、笑う。

松一郎 ところで、おかしな話を聞いてな。

枝野 おかしな話？

松一郎 おまえたち2人が近く果し合いをする、というのだ。

間

松一郎 本当のようだな。おまえらが果し合いの前に、2人の写真を残したいって撮影局に来てくれたのはよ、うれしいよ。だがよ、我が藩の重鎮が、なんで頭の悪い若いもんみたいに果し合いだよ。

三木 お言葉には感謝いたす。ただ、われら、武士ならば。

松一郎 一刀流と二刀流のわが藩一の遣い手がなんだよ。昔から仲がよく、たしか嫁ご同士が、姉妹ではなかったか。

三木 およねと、おいと、たしかに

松一郎 なぜなんだ。

三木 幕府と朝廷が戦になるのは、姉川殿もご存知のはず。

枝野 どちらに付くか。わが藩決めねばならぬ。

三木 拙者の仕える筆頭家老の岩田さまは、幕府側。

枝野 拙者の仕える次席家老の安西さまは、朝廷に付くべきと。

三木 話し合えど、決着は付かず。

枝野 このままでは、藩の中で戦になりかねぬ。

三木 われらの果たし合いであれば、誰もが。

枝野 納得するであろうと、まあ、大人の知恵でござるな。

松一郎 馬鹿か。

三木 声が大きうござる。姉川殿。

松一郎 いいんだ、壁厚いから。どちらにもつかず、戦を避ければいいことではないか。

枝野 そういうわけにも参りませぬ。

松一郎 この撮影局の客は、最近増えてな。なぜか、分かるか。いずれ戦になるだろう。そ

の前に、自分の姿を、妻や子のために残しておきたい。そう言ってみんな来るんだぜ。(2人に)馬鹿じゃねえか。

枝野 戦は昔から繰り返されてきたことごとさる。姉川殿。これからも繰り返され、戦から次の戦へ、鎖のようにつながっていく。なくならぬ。そういうものなのだ。だから、武士がおるのだ。

松一郎 誰がやれっていったんだ。

2人 殿が。

松一郎 バカ殿が。

2人 声大きい。

松一郎 いいんだ。壁厚いから。いいか。バカ殿の言うことなぞ、聞くことはねえんだ。逃げちまえ、逃げちまえ。

枝野 しかしわれら武士。果たし合えといわれれば、それは上意。くだらぬと思えども、上意。

三木 姉川殿、分かってくれ。われら武士、タカではなく、ハヤブサでもござらん。飛び去るわけには参らんのだ。姉川殿のように、これからの時代を読み、武士すら捨ててしまう、そういう鳥のような生き方も分かる。それができたら、とも思う。だが、できぬのだ。案山子かもしれぬが、立つべきところに必ず立っている、そういうものもいるのだ。分かってくれ。

松一郎 (間) しょうがねえな。気が変わったら、言ってくれ。

三木 かたじけない。では、そろそろ参ろうか。

枝野 それこそ案山子のように、半日ほど、身動きせずにおらねばならんとか。

松一郎 そんなに長くねえよ。ほんのいっときだ。

三木 2人のうち、生き残った方に出来上がった写真をお渡し願えるか。

枝野 われら子どものころから同じ道場で腕を磨いた仲じゃ。写真を仏壇に置き、未永く三木の魂を弔おうと思っておる。

三木 何を言う。弔うのはわし、弔われるのは枝野、おぬしじゃ。

2人、笑う。

松一郎 そこに立ちな。

三木はすぐ立つが、枝野は「ルンバ」に気をとられる。

三木 枝野、どういたした。

枝野 いや、今、大きな虫が。気のせいでござろうかの。

三木 大きな虫？おぬし、夕べ飲みすぎたのではないか。

2人、笑顔でポーズをとる。松一郎、カメラを構える。

松一郎（突然怒り出す）切るな。おまえら、人を切ったりするんじゃない。いずれ、武士なんてなくなるのさ。刀で人を切るような、そんな仕事が続くわけがねえ。写真屋みたいな、新しい仕事がドドドドオつとよ、生まれるだろう。新しい時代を、新しい光を、おまえら、見たくねえのかよ。

2人、ひきつった笑顔のまま聞いている。

溶暗。

第2場 夏

セミの声。照明が入ると、樹一郎と榎田、写真館にいる。榎田は座って、熱心に書類を読み込んでいる様子。第2場では「ルンバ」はない。

榎田 ダメですね。

樹一郎 ダメですかあ。

榎田 率直に言いますが、再建計画になっていませんよ。

この計画、写真館の収入が増えるのが前提になっています。しかし、収入が増える見通しがないでしょう。あるんですか。

樹一郎（黙って、首を振る）

榎田 隣のクリーニング店も廃業しました。こういう商店街は、今厳しいんです。みんな車でイオンモール行っちゃうんですね。人の流れがこっちに来ないんです。客が増えることを前提とした経営計画は現実的じゃない。

樹一郎 だから追加融資を。

榎田 検討させていただきます。融資しないとは言いません。ただ、この計画だと審査を通るかどうかが分かりませんよ。

樹一郎 作り直します。

榎田 前にも申し上げましたが、この土地を買いいたいという人がいます。そちらはご検討いただけましたか。

樹一郎 何に使うんだった？

榎田 駐車場です。

樹一郎 面積だけはあるからね。

榎田 こういった老舗だと、自分の代でつぶすのは嫌なもんでしょね。それは分かりま

す。うちとしましても、経営を建て直して、写真館として存続してほしいとは思っているんです。そのためにも、現実的な再建計画をぜひお願いしますよ。（にやりと笑い）先輩なら、できますよ。

樹一郎 先輩っていうのやめてくれ。

榎田 先輩、うちの高校の野球部の伝説の最強メンバーじゃないですか。先輩が暴れて出場停止にならなきゃ、間違いなく甲子園行けたって聞いてますよ。

樹一郎 おれ、それ一生言われるのかな。

花、写真を抱えて登場。

榎田 やあ、花ちゃん。

花 あ、榎田さん、どうも。師匠、この人、裏表ありますよ。

樹一郎 何てこと言うんだ。

榎田 嫌われちゃったな。

花 師匠、草二郎さんからさっき電話がありました。

樹一郎 なんて？

花 芽衣。パパとまちで会ったんで、ちょっと写真館に連れて行くって。

樹一郎 芽衣。パパ？

花 いけない。芽衣のお父さんです。私小さいころから芽衣のうちに預けられてた時期があって、娘みたいにかわいがってもらったんです。

樹一郎 人の親を。パパとかママとか言うな。

花 すみません。

榎田 ところで、前から気になっているのですが。

樹一郎 何が。

榎田 この人たち、何の劇を見ているんです？

樹一郎 この人たちって？

榎田 写真に写っている人たちですよ。「劇場に来た観客たち」でしたっけ。

樹一郎 諸説あるんだ。有力なのは「ロミオとジュリエット」かな。3代目はヴェローナの市民に紛れ込んで、彼らを写した。

花 あたしは違うと思います。

樹一郎 こいつのは少数意見。

花 タイトルは分かりませんが、主人公たちの結婚で終わるハッピーエンドの恋の物語を見ているんです。

樹一郎 それ言ってるの、おまえだけだ。根拠ないだろ。

榎田 この人たちの誰かに聞いてみたらいいじゃないですか。このまちの人たちなんですよ。

樹一郎 このあと戦争だったからな。商店街も空襲で焼けてさ。

花 焼け野原の写真、見ました。

樹一郎 それも3代目が撮ったんだけどな。大勢死んだんだ。この中に、今も生き残っている人がいるとは、思えないな。

榎田 劇を見てるときは、すぐにそんな時代が来るなんて、戦争や自分たちの死が刻々と近づいているなんて、思わなかったんですね。みんな、しあわせそうな顔だ。

草二郎と万作登場。

草二郎 兄貴、お客さん連れてきた。

花 芽衣。パ。パ！

万作 花ちゃん。久しぶりだね。

樹一郎 東先生のご主人？

草二郎 そうだよ。先生、兄貴は奥さまのクラスでした。

万作 知ってるさ。高校では、暴れたみたいだな。

樹一郎 一生言われますね。先生には迷惑かけました。

万作 だいぶ前に君が市民ホールで写真展をした時、家内と見に行ったよ。

樹一郎 あれも、若気の至りでした。

万作 そんなことはない。いい写真だったよ。きょうは家族写真を頼もうと思ってるね。

樹一郎 先生、退院されたんですか？

万作 いや。週末だけ一時退院の許可が出そうなんだけど、そのときに一度家族写真を撮りたいと言いついてね。君に撮ってほしいというんだ。

樹一郎 私に？分かりました。週末ですね。

万作 榎田君じゃないか。

榎田 どうも。

樹一郎 お知り合いだったんですか。

万作 同級生だよ。今かよってる英会話教室でね。

榎田 そういうことはあまり言わないでいただきたいですね。

万作 どうして？

樹一郎 英会話習ってどうするんだ。海外出張とかないだろ。

榎田 こういうことを言われるんですよ。必ず。

万作 あれ、どうなった？

榎田 あれ、といますと？

万作 信金のロビーをコンサートに貸してもらえないか、という話だよ。支店長さんに伝えてもらえたかな。

榎田 それがですね。支店長があまり前向きでなくて。管理の問題があるようです。私

は使ってもらわなければならないけど伝えたのですが、

残念だな。引き続き、頼んでくれないか。発表の場がないと、合唱団も練習に張り合いが出なくてね。経済がよくなっても、歌う場所や、歌を聞かせられる場所がなくなってしまうえば、そんなまちに誰が住むんだろうね。歌える場所が必要だよ。

分かりました。

では。

花

芽衣パパ、芽衣ママよろしく……お伝えください。

万作

花ちゃん、また、遊びにおいでよ。店長さん、この子をよろしくお願いします。

草二郎

(樹一郎に)花ちゃん、だいぶ、敬語でしゃべれるようになったじゃないか。写真も上達した？

樹一郎

まあな。

榎田

ところで……。

樹一郎

なんです。

榎田

この間の話ですが……。

樹一郎

ああ、思い出した。写真を見てくれという話だったね。あんたが撮った。

榎田

ええ。

樹一郎

いつでもかがうよ。

榎田

実は、持ってきているんです(かばんから写真の束を取り出す)。率直に批評していただければ。

樹一郎

分かった。(草二郎に)榎田さん、市の写真コンテストで2年連続、銀賞を取ったんだ。

榎田

3年連続です。

草二郎

すごいじゃないか。

榎田

銀賞ですからね。

草二郎

3年連続で金賞のやつがいるのか。

榎田

いや、金賞は毎年違う人なんですよ(話しながら、作業台に写真を広げる)。

樹一郎じっと見入る。草二郎加わる。花は見ない。

草二郎

きれいに撮れてる。

榎田

ありがとうございます。

樹一郎

だめだな。

榎田

え？

樹一郎

あんたがいないんだ、この写真の中に。

榎田

どういことです。

樹一郎

風車や養鶏場、朝顔市。素材としてはいい。でもこれは誰でも撮れる。これもこ

れも。あんににしかないものが、ない。それじゃ、撮る意味が無いだろう。

草二郎 兄貴。

樹一郎 切るな。

榎田 えっ。

樹一郎 簡単にシャッターを切るなってことだ。フレームの中に、自分にしか撮れないもの、自分がこれだと信じるもの、そういうものが現れるまで、シャッターを切るんじゃない。おれはそう思ってる。

榎田 こんなまちにいちやな。

樹一郎 え？

榎田 こんなまちじゃ、人が驚くような構図は見つからないよ。おれも海外にいたり、東京にいたりできれば、もっと何かできるのによ。

草二郎 場所の問題か。

榎田 場所の問題さ。このまちに何か、ここにしかないようなものがあるか。ここでしか撮れないようなものがないだろ。(樹一郎に) あるんなら、あんなここで撮っただろ。なんでわざわざイラクやアフガニスタンで撮ったんだ。

樹一郎 それが必要だったんだ。

榎田 バブルの時代には必要なものが手に入っただろうさ。今は全然ダメさ。就職もない、チャンスもない。こんなまちのつまんねえアジサイとか風車とかニワトリを撮ってさ。それでダメな写真呼ばわりかよ。たまんねえな。

草二郎 率直に意見を言えと……。

榎田 40代50代のやつらに言われたかねえんだよ。おまえらがバブルに浮かれて日本経済を潰さなきゃ、30代にもまだチャンスがあったんだよ。

草二郎 40代がみんな、「マハラジャ」で踊ってたみたい言うなよ。兄貴はあのころからイラクで撮ってたんだ。

榎田 命がけて写真を撮りにいけば、おれだって行ってたさ。30代にはよ、チャンスがなかったんだよ。商店街を歩き回ってよ。しけたつらした経営者連中の融資の相談を聞いて歩いてるとよ、6代目。だんだん商店街が下り坂に思えてくるのさ。それも年々、角度が急になってくるんだよ。今じゃもう、立ってるのがやっとなのさ。英会話習っても、ここから抜け出せるわけじゃない。毎日毎日、井戸の底に下りてくような気分さ。あんなさ、そういう所に立っている人間の気持ち分かるのかよ。ドゥー・ユー・アンダスタンド？え、6代目よ。

樹一郎 分からんな。

榎田 あんたはいいよな。飛ぶことができ、翼を休める森もあって。飛べないニワトリを見下ろせば、気分いいだろうぜ。いつまでもいい気になるなよ。絶対、ここは駐車場にしてやるぜ。

草二郎 さっきと話が違うだろ。

榎田 いいか、(榎一郎に)あんたは信用金庫に金を借りてる。店の運転資金を借りてる。そのことを考える。おれたちニワトリに、ちゃんと返すめどをつけねえと、あんたの森は、モータープールだぜ。

花 師匠、塩はどこに撒きましようか。

榎田 ちゃんとしろよ、6代目。

藤谷、登場。

榎一郎 あれ、きょうの予定では……。

藤谷 こないだちょっと時間ができたんで、花ちゃんに撮ってもらったのよ。姉川、いなかっし。

榎一郎 こいつに？

花 用意しておきました。(写真を取り出して藤谷に見せる)

榎田 また1週間後に来るので、再建計画の練り直しをお願いしますよ。追加融資については、上司と相談しておきますので。

藤谷 いいじゃない。花ちゃん、上手よ。

榎一郎 ええーっ。

花 ありがとうございます。

榎田 聞いてんのかよ。

榎一郎 どういうことです。

藤谷 上手よ、この子。ほら、見て見て。

榎一郎、写真を取り上げて見つめる。

榎一郎 これがいいんですか？

藤谷 いいと思うよ。

榎田 人の話聞いているか？

榎一郎 撮り直させてくれ。

藤谷 え？そんな、何枚もいらないうって(うれしそう)。

榎一郎 おれが撮り直す。

榎田 何の写真か分かりませんが、私にも撮らせてもらえませんか。

藤谷 まあ(うれしそう)。

榎一郎 (榎田に)おまえは帰れ。

榎田 アイ・シー、アイ・シー。帰るよ。(持ってきた写真を集める)きょうは、率直な批評を、サンキュー・ベリマッチ。覚えとけ。人の写真にはあれこれ言っても、あんたにはもう、翼は無いぜ。

榎田、去る。

藤谷 なにじん？

草二郎 兄貴。

樹一郎 ここ、駐車場でもいいかな。

花 師匠、あたし、この写真館は必要だと思うんです。

草二郎 ちよっと兄貴。(店の隅に樹一郎を引っ張っていく)

樹一郎 なんだ。

草二郎 セネガルで、フランスの取材チームに会った話をしただろ。

樹一郎 聞いた気がする。

草二郎 きょうメールが来た(スマートフォンを見せる)。

樹一郎 何語だ。

草二郎 フランス語に決まってるだろう。もう忘れたのか？

この冬に、ソマリアに入るらしい。アフリカの。カメラマンを探しているんだ。「君の兄はどうしているのか？まだ現役なら連絡を取りたい。経験豊かなカメラマンに仲間に加わってほしいのだが、どうだろう」。

樹一郎 フランス人か。

草二郎 フランス人を馬鹿にすることはないだろ。写真を発明したのはフランス人だ。知ってたか。

樹一郎 知ってるさ。ニエプスとダゲール。どっちかが月のクレーターの名前になってる。

草二郎 ニエプス・クレーターだ。

樹一郎 しかし、店をどうするかだな。

草二郎 花ちゃんに任せちまえよ。

樹一郎 あいつに？

草二郎 腕が上がったんだろ。兄貴が撮るのはこんな小さなまちの結婚式とか、七五三じゃない。やらなきゃいけないことは、別のことだ。自分でもそう思ってるんだろ。

樹一郎 現場を離れて長いからな。

草二郎 戻るつもりだっただろ。

樹一郎 ソマリアは内戦が続いているよな。

草二郎 あのころのバグダッドほど危険じゃないさ。兄貴は鳥だ。飛べよ。

樹一郎 (短い間) メールを送っておいてくれ。「ウイ・ムッシュユ」と。

草二郎 (笑顔で) 分かった。

草二郎、去る。

藤谷（樹一郎に）悪いところにお邪魔したみたいね。

樹一郎 そんなことはない。

藤谷 で、撮り直す？

樹一郎 いや。ごめん。それがいいなら、いいよ。

藤谷 こっちこそごめんね。（写真を抱えて）花ちゃん、ありがとうね。

花 こちらこそ。

藤谷 花ちゃん、あたしたち、ここ以外のどっかで会ってるかな。なんか、あたしあなたに見覚えがあるのよ。

花 ここ以外では会ってないと思います。裁判員にもまだ当たっていませんし。当たったら怖いな。（自分のTシャツを引っ張り）こんな服で裁判出られませんよね。

藤谷

服装の規定はないのよ。きょうみたいな暑い日はネクタイしない男も多いわね。せいぜいちゃんとアイロンかけたシャツっていうくらいかな。

花 アイロン、苦手なの。

かあさんおばけ、アイロンを持って登場。

花（かあさんおばけに）どうしても苦手。（樹一郎に）藤谷さんを駅まで送ってきます。

樹一郎 ああ、頼むよ。

花、帽子掛けの前でジャンプしてキーを取ろうとし、うまくいかないで、脚立を引き寄せてキーを取る。藤谷を連れて去る。かあさんおばけ、逆方向に去る。樹一郎、ルンバのスイッチを入れて足元に置く。外から「どろっかどろっか、写真とろっか」という声が聞こえる。竹一郎が登場し、カメラを用意し始める。

竹一郎

そんなんじゃないよ、いいかい。卒業式とか、結婚式とか、一生に一度しかないんだよ。そういう時に撮る写真は、そんなちやちなもんで撮るんじゃないよ、ちゃんと写真館で、いいカメラで撮らなくちゃ。大人になって、ああ、いい卒業式だったな、いい思い出だったな。そう思い返すときに、アルバムに張った写真がピンボケだったり、露出が甘かったりしてみな。悲しいだろう。何か記念すべき出来事があると、昔のヨーロッパの貴族や裕福な商人は肖像画を描かせたもんだ。フランス人の発明家が写真を発明して、彼が死んだとき、詩人は詩を贈った。肖像画家を雇えない庶民に、彼は写真を贈った、とね。

高校時代の花と芽衣が制服姿で、卒業証書を持って登場。

芽衣 あ、私たち当然、貴族とかではなく……。

花 お支払いのお金はありません。

竹一郎 金じゃねえんだ。おれは適切でないレンズ、適切でない光で撮ってるやつが大嫌い
でね。見るだけで血圧が上がるんだよ。おまえさん。この間、雇ってくれてここ
に来たお嬢さんだね。

花 まだ、あきらめてません。

竹一郎 (突然怒り出す) 写真館で働こうって人間が、あんなもんで記念撮影か。

芽衣 急に切れないでよ。びっくりするじゃん。

竹一郎 悪いな。適切でないことには、我慢できん性分だな。

芽衣 そんなの、いまどき、はやんないよ。

花 すみません。心を入れ替えますからいつか、雇ってください。

竹一郎 悪いね。暗室に入れないんじや、写真屋で働くのは無理だ。

花 あのときは。

竹一郎 そういふ人がいるというのは聞いたことがあるよ。あんた、子どものころになんか
あったんだろう。ま、いいさ。息子の代になったら、また来るといい。そのころに
は、技術が進んで暗室なしで、写真を処理できるかもしれない。

花 本当ですか。

竹一郎 そんな時代には、おれは生きていたくないけどね。

芽衣 息子さんがあとを継ぐの？

竹一郎 おれが死んだらな。しかしどうかな。本当にここで落ち着く気があるのかなのか。
今は鯨の写真を撮るために船に乗ってるよ。(怒り出す) ろくでなしめが。世界を
旅すれば、いい写真が撮れるってもんじゃねえんだ。そりゃ、おれだってチャンス
があれば行きたかったさ。北極やサハラ砂漠。だがよ、このまちに写真屋がなくな
っちゃうと、みんな困るだろうが。くそっ。

芽衣 だから急に切れないでって。血圧あがるよ。第一、あたしたちに怒ってもしようが
ないでしょ。

竹一郎 あ。(カメラのレンズを外し、しげしげと見る) こいつは適切でないレンズだ。ち
よっと待ってる。(去る)

芽衣 花よかったね。いつか雇ってもらえるかもよ。

花 どうかな。

芽衣 (ルンバを気にする) 変な虫がいない？(こ)。

花 え？いないけど。

芽衣 きのおさ、花の夢を見たんだ。

花 あたしの？何してた？

芽衣 それがさ、果し合いを見てるの。

花 果し合い？

芽衣 2人とも武士の妻で、だんな同士が果し合いをするのね。それで刀で切りあつて
いるんだわ。花のだんなが二刀流で、あたしのだんなは二刀流。

花 どっちが勝ったの？

芽衣 相打ち。2人とも死んじゃうの。

花 芽衣、本当はあたしが嫌いなんじゃないの？

芽衣 そんなことないよ。あたし、一番好きな英単語 「フラワー」。

竹一郎、戻る。カメラのセッティングを始める。

花 ありがとう。

芽衣 「フリーダム」とか 「ファイト」も好きだな。エフがついてると大体、好き。花、

花 一番好きな英単語は？

芽衣 なんだろう。

花 「カメラ」オア 「フォトグラフ」？

芽衣 ううん。私、「イエス」。

花 イエス、ノーのイエス？なんで？

芽衣 カメラのシャッターの音に似てない？

花 えー。似てないよ。でも、花、本当に写真が好きなんだね。

花 （笑顔で）イエス。

竹一郎、苦しそうに胸を押さえ、倒れる。

芽衣 店長さん（駆け寄る）店長さん、どうしたの？花、救急車、救急車。（花、駆け去

る）店長さん、店長さん。

溶暗。

第3場 秋

照明が入ると、樹一郎と芽衣の母なつめがいる。家族写真を撮る準備をしている様子。ルンバは止まっている。

なつめ （姉川家の先祖たちの仮装写真を見ながら）あなたはまだこういう写真を撮らないの？

樹一郎 撮りません。

なつめ 早く撮ればいいのに。あれに仮装しなさい。

樹一郎 あれって。

なつめ AKB48。

樹一郎 そんな大勢に一度に仮装するのは無理ですよ。

なつめ 侍の時代からあるんだものね、この写真館。大変なものね。当時は写真を撮る間は長い時間、体を動かさなかったんだよね。

樹一郎 ええ。体を固定する台を使っただけです。私の子どものころまで置いてありました。

なつめ そう。うちの旦那、まだかな。

樹一郎 花が迎えに行ったんで、もうすぐだと思えます。芽衣さんはその後で来ると聞いてます。

なつめ そう。それはデジカメ？

樹一郎 フィルムカメラを使っている写真館はほとんどなくなりました。

なつめ 写真って、この100年ですごく進歩したのね。

樹一郎 デジカメが普及したんで、暗室がいらなくなっただけ、たかさんのフィルムを持ち歩く必要もなくなりました。

なつめ 進歩したわねえ。

樹一郎 写真が進歩したほど、人類は進歩していません。

なつめ そうかな。

樹一郎 「ギリシヤ人の宇宙のカメラ」。

なつめ ギリシヤ人がどうしたって。

樹一郎 ギリシヤ政府は、人工衛星からアテネの住宅地を撮影して、青い点を選び出して分析するんです。青い点、何だと思えます？

なつめ ブドウ畑？

樹一郎 スイミング・プールです。ギリシヤの金持ちは必ず、庭にプールを作る。プールのある邸宅を衛星写真で把握して、その持ち主が税金を適正に納めているかどうかを調べる。納税額が少ないと、査察に入る。そんなことのために宇宙から撮った写真を使っている。

なつめ あたしの病気も写真で分かったの。胃カメラで。

樹一郎 ああ。

なつめ ほんと、胃カメラで撮れる範囲だけのがんなら、よかったんだけどねえ。

間。万作登場。不自然なくらい正装。少し遅れて花も登場。

樹一郎 いらっしやい。

万作 本当にすまんね。撮影を頼んだのが夏なのに、今じゃ、もう秋だ。ブドウ買った

てきたよ。あとでみんな食べてよう。

樹一郎 ありがとうございます。

なつめ
週末になるとあたしの具合が悪くなるんだもの。あたしのせいだわ。樹一郎君
ごめんね。

樹一郎
とんでもない。

花
芽衣ママ。

なつめ
花ちゃん、久しぶりね。写真館の仕事はどう？

花
まだまだです。師匠に怒られてばかり。

万作
いやそうでもないよ。なかなか評判いいんだよ。なあ、樹一郎君。

樹一郎
以前よりは、ましですね。

なつめ
花ちゃん、よく教えてもらいなさい。でも殴られたら、警察に言うのよ。

花
まさか。

樹一郎
殴ったりしませんよ。

なつめ
この人、野球の試合に行つて、相手チーム全員ボコボコにしたからね。

万作
もう少しで警察ざたになるとこだったんだ。

なつめ
樹一郎君は野球じゃなくて、ボクシングの選手になればよかったのよ。好きな

だけ殴れるでしょ。金メダル取れたかも。

若気の至りでした。先生には迷惑掛けて。

花
本当なんですか。

樹一郎
まあ、相手も悪かったんだけどね。なんだっけ。試合でミスをした後輩をグラ

ウンドに正座させて、頭を踏みつけて、虫を食べさせようとしてたのよ。バッ

タだっけ。

なつめ
ミミズだったかバッタだったか忘れしました。

樹一郎
最初私がやめさせようとしたの。そしたらあいづら、これはチームの伝統で、

自分らも先輩にされたことなんだって。そしたら樹一郎君がいきなり。

これまで繰り返ししてきたから、これからも繰り返し返すなんて、そんなのダメだろ

う。人が人に虫を食わせていいはずがない。人は鳥じゃない。

なつめ
こういう子だからね。でも悪い子じゃないのよ。

花
はい。ありがとうございます。あ、師匠、午前中に神社で秋祭りの写真、撮っ

てきました。

樹一郎
赤ちゃん相撲だな。ご苦労さん。来年はおれが行くよ。

花
え。

樹一郎
どうした。

花
宮司さんが、花ちゃん来年もぜひ君に頼むよって。

樹一郎
そうか。

万作
草二郎君は？

花
ネパールです。

万作
ネパール？

樹一郎 ヒマラヤを越える渡り鳥を撮るプロジェクトらしいんですけどね。
万作 それは大変だな。
樹一郎 スタッフが1人、高山病になったとか。あいつは大丈夫みたいですけど。
花 そういえば師匠、もうすぐ交信時間です。
樹一郎 そうだな。
なつめ 交信時間？
花 時間を決めて、インターネット電話で連絡してくるんですよ。映像も見られるんです。
なつめ 便利になったのね。

藤谷登場。

樹一郎 あれ。
藤谷 ああ、きょうは写真撮りにきたわけじゃないのよ。
樹一郎 やっぱり撮り直しですか？（少しうれしそう）
藤谷 そうじゃないのよ。あの写真、うちの家族にも評判よくてさ、妹のも撮ってもらえないかと思って。花ちゃんに。
花 ありがとうございます。
藤谷 妹は来るの嫌がっているんだけど。ここさ、古い建物だから、心霊写真が写るとか、幽霊が出るとか、うわさがあるんだって。
樹一郎 心霊写真なんか写るわけない。ここではプロが撮ってるんだ。
藤谷 そうよね。
樹一郎 幽霊は出ますよ。
藤谷、万作、なつめ えーっ。
樹一郎 冗談です。ま、古い建物なんで変なことはときどき起きますけどね。花の携帯電話が誰もかけてないのに鳴ったりね。
万作 それはどっかの男の子が無言電話かけてるんだよ。
樹一郎 花は亡くなったお母さんがかけてきているんだと。
花 ごめんなさい。そんなはずないですよね。

榎田、登場。

榎田 どうも。
樹一郎 今、撮影準備中だ。
榎田 待たせてもらいますよ。
万作 榎田君。

榎田 あ、先生。

万作 支店長さんはその後なんと。

榎田 ああ。正式にお断りしてこいと。最終決定です。

万作 残念だな。

花 芽衣パパ、ここで歌ったら。

万作 え？

花 そうよ、ここで歌えばいいんだわ。市民ホールほど広くないけど、その分、コンサート回数を増やせばいいのよ。お客さんはそこにいすを並べて、合唱団のみなさんはそこね。片付ければお客さん50人くらいは入れるわね。どうせ夜は写真館のお客さんはほとんどいないし。師匠、どうですか。夜、このスペースをお貸しするのは。

樹一郎 ああ、別にかまわないよ。

花 壁が厚いし、周りに家もないから苦情も来ないわ。

万作 斜め向かいの和菓子屋さんは人住んでないか。

樹一郎 1年前に移転しました。あれ空き家です。

万作 隣のクリーニング店は？

榎田 半年前に廃業しました。あれ空き家です。

花 鍵を預かってます。あ、控え室代わりに使えますね。

なつめ いいわね。100年前の「劇場に来た観客たち」、もしかすると自分たちの祖先さまと一緒に、コーラスを聞くのね。ねえ、私も久しぶりに歌いたくなかったわ。

花 使用料とかは、相場を調べますけど、安くつけてっこうですよ。ねえ、師匠。

樹一郎 使用料とるのか？

榎田 とってください。経営改善につながる。

万作 もちろん払うよ。

花 ひとつだけお願い。

万作 何だい？

花 私に写真を撮らせてください。みなさんが歌っているところを撮りたいの。上手に撮れたら、買い取っていただければ。

万作 きっとみんな買うよ。

藤谷 (樹一郎に) 商売うまいね。

万作 他のグループにも教えていいかな。みんな市民ホールがなくなって困ってるんだ。大正琴、民謡、人形劇、落語、手品……。みんなは無理か。

花 喜んで。ねえ、師匠。

樹一郎 いいですよ。こんなところでよければ。

花 交信時間だわ。

樹一郎 あ、本当だ。

全員、パソコンの周りに集まる。樹一郎はインターネット電話用のヘッドホンをつける。

樹一郎 聞こえてるよ。映像がまだ入らない。あ、入った。おまえ、ひげそれって言っただろ。

なつめ これ、ネパールなの。

花一 そうです。時差5時間だから、今夕方ですね。

樹一郎 きょうは大勢いるよ。(小型カメラを取って)東先生。(万作、カメラに手を振る)。奥さんの方の東先生。(なつめ、手を振る)。きょうは家族写真を撮るためにお見えなんだ。あと、藤谷判事(藤谷、手を振る)。これは、客じやないけど、信用金庫の榎田氏。あ、花もいるよ(花、手を振る)。そっちは順調か。え?きょう撮れたのか。そうか。よかったな。うん、分かった、分かった。だからおまえ音でしゃべるなって。え、これがそのツルたちが飛び越えていく山か。驚くなあ。

なつめ 大きな山ね。

樹一郎 待て。ちよっとカメラを止める。おい、一羽、まだ飛んでるぞ。

一羽、身乗り出してパソコンを見つめる。

樹一郎 え?そういうやつがときどきいる?仲間とはぐれて、一羽だけで飛び越えようとする鳥が。そういう鳥は、適切な風に乗ることができず、越えることはできない。そうか。こいつはそういう一羽か。待て。カメラをそのままにしろといってくれ。

音楽。パソコンを通じて、ヒマラヤの夕日の赤い色が写真館の中に強く差し込んでくる。音楽。

なつめ 私たちは息を止めた。そうせずにはいられなかった。まるで少しでも息を吐き出せば、それがはるか離れたヒマラヤで夕暮れの風となり、この無謀な一羽を、群れからはぐれたチャレンジャーを、谷間へと払い落としてしまうかのように。送られてきた映像の中でその鳥は、夕日に染まった巨大な壁に挑んでいた。適切な時にも支えられず、適切な風にも後押しされず、ただ自分の力で。描いていたのは一本の線。紙飛行機やグライダーではけっして描くことができない。意思を持つものだけが描ける頂への直線だった。そして、そこにあるのは

8000メートル級のそそり立つハードル。まるで宇宙を目指すかのような、孤独な、意味の無い急上昇。なぜ行くのか。答えはない。赤い光の中をただ、上昇し続けた。私はギリシア神話を思い出していた。山に張り付けにされたプロメテウス。その内臓を食らうために日々訪れる凶暴なハゲタカ。神話の鳥のすさまじさで、彼は上昇していた。見えない何かに突き動かされて、見えないプロメテウスを襲うために。

この子、越えられるんじゃない。

無理だ。

いけるかも。

頑張れ。

榎田

藤谷

花

なつめ

(間) その一羽は、静かに山の向こうに消えた。できるはずがないと思われた孤独な挑戦を成し遂げた。世界で最も高い壁を越え、しかしだれの拍手も受けず、仲間を迎えられることもなく。見ていたのははるか遠く離れた写真館に集まっていた日本人だけ。私たちはしばらく、赤い光で輝くパソコンの中の異国の山に見入っていた。だが心では、そこにはもう写っていない小さな翼について思うことをやめられなかった。

赤い光が消えていく。音楽終わる。

樹一郎

あいつ、越えたな。

花

越えたね。

なつめ

できるのね。こういうことが。

樹一郎

草二郎、あいつ、越えたぞ。

芽衣、登場。Tシャツ姿。

万作

なんてかっこうだ。

樹一郎

草二郎、また連絡するよ。仕事だ。

なつめ

芽衣、着替えてきなさい。着替え持ってきたの？

芽衣

お母さん、中止にできない？

万作

芽衣。

芽衣

やっぱりダメだわ。私は撮れない。撮るべきじゃないわ。死ぬための写真なんて。

万作

芽衣、死ぬための写真じゃない。

芽衣

お母さん、闘うのをやめたの？どんなことがあったって、病氣と闘って、治してやるって言ってたじゃない。病氣に勝てないから、生きてるうちに、家

万作 族で写真を撮っておこうなんて、そんな弱い気持ち、お母さんじゃないやめなさい。

芽衣 いつもあたしに闘えって。母さん、闘おうよ。闘って治そうよ。闘ってるわよ。でもね、勝てるとは限らないの。起き上がれないようになる前に、お父さんと、おまえと、写真を撮っておきたいんだ。写真を見て、思

い出してもらうためにね。

芽衣 そんなの、私は嫌。写真なんか撮らない。母さん、生きて。死なないですよ。写真は撮りたいの。お願い。

なつめ 撮らない。

芽衣 お願い。

花 芽衣、芽衣ママの言うことを聞いてあげて。

芽衣 花は黙ってて。

花 たまには芽衣ママの言うことを聞かなくや。

芽衣 今、なんて？花、あたしがいつ、母さんの言うことを聞かなかった。

花 子どものとき、ピアノやめたよね。合唱団にも入らなかった。

樹一郎 花、やめろ。

花 芽衣は、やりたいことないのよ。やりたくないことはあるけど、やりたいことはないの。そういう人なの。芽衣。パパや、芽衣ママとは違うの。それがいけないなんて言わない。でも今、芽衣ママのお願いは、聞いてあげてよ。家族の問題でしょ。口出さないですよ。

芽衣 でも……。

花 黙ってて。花はお母さんいないじゃない。私の気持ち、わかんないわよ。

芽衣 芽衣。

花 母さんはいたよ。父さんはいないけど、母さんはいた。

芽衣 あなたを虐待して、刑務所に入れられて、刑務所で死んだお母さん？一緒にしないでよ。

万作 芽衣、そんな言い方やめなさい。

芽衣 とにかく、私は写真は嫌なの。どうしても撮るなら2人で撮って。

芽衣、走り去る。花、後を追って走り去る。

万作 2人で撮るか？

なつめ そうね……。やめておきましょう。2人の写真なら、たくさんあるじゃない。後で、そう、もしかして私がいなくなった後で、芽衣が私たち2人の写真を見て、きょうのことを思い出すと、きっと悲しいと思うの。樹一郎君ごめんね。

樹一郎 いいえ。

なつめ 2人で写した写真の中では私、あれが一番好きだわ。覚えてる？証明写真の撮影ボックスで撮った写真。

万作 覚えてるよ。

なつめ 面白いことを考えるのよ、この人。ボックスの前で2人で待ち構えて、お人よしそうな人が写真を撮ろうとするのをつかまえて、頼み込むの。どうしても彼女と2人で写真を撮りたいんだ。4コマ目を譲ってくれて。あんた、4コマもいらないだろうって。3コマ撮ったところで大急ぎで交代して、2人でボックスに飛び込んで。20歳の私たち、お金なくて、でも元気だった。

万作 そうだったね。大学生のころだね。

なつめ この人ね。本当にお金なくて。デートに誘うのも、映画に行こうじゃなくて、「映画館に行こう」よ。何かと思ったら、映画館の前に自転車止めて、ずっと映画の看板見ながら、この人、きつとこういうストーリーだつて、きつとこんな場面があるって。ウンばっかり。でも面白いの。1時間、話し終えたら、次の映画館に。

万作 お金がなかったからね。

なつめ でも楽しかったな。すごく幸せだった。

万作 疲れるよ。もう病院に帰ろう。

なつめ (樹一郎に) 「ギリシャ人の宇宙のカメラ」だっけ。

樹一郎 え？

なつめ 人工衛星から見たら、スイミング・プールさえ青い点なのよね。一人の間違って、本当に小さな粒なのよね。

樹一郎 そうでしょうね。

なつめ ひとりの人間が持っている時間も、空間も、とても短くて、小さいのよね。でもさ、その人間が持っている想像力って、ものすごく大きいと思わない？。果てしなく広がって、世界を駆け巡って、あの鳥のように、小さな翼でヒマラヤを超えて、人生を面白くするの。人は死ぬけれど、それまでは楽しく生きられるのよね。想像力と、音楽と、好きな人たちと撮った1枚の写真があればね。それでいいのよね(疲れた様子)。

万作 さあ、帰ろう。また来るね。

なつめ 樹一郎君。花ちゃんをよろしくね。

樹一郎 あ、はい。

万作、なつめ去る。榎田もかばんを持って立ち上がる。

樹一郎 帰るのか。再建計画を話し合うんじゃないのか、

榎田 現代人には考えることがたくさんあってね。あんたは、150年前から変わんな

い写真館で、昔どおりに記念写真撮ってればいいだろ。

樹一郎 変化はあるさ。店長がもうすぐ代わる。

榎田 え？

樹一郎 おれは年末から海外だ。いつ戻れるか分からない。

榎田 また、イラクかアフガニスタンに行くんですか。

樹一郎 今度はソマリアだ。アフリカの。

榎田 僕を連れて行ってもらえませんか。信用金庫は辞めます。アシスタントとして使ってください。

樹一郎 悪いが、アシスタントを使う余裕は無いよ。それにフランスのチームだから、英会話は役に立たない。

榎田 そうですか。

樹一郎 そうがっかりするな。

榎田 ドント・マインド。がっかりなんてしてねえよ。あんたと一緒じゃ、あんた程度

のカメラマンにしかなれねえしな。おれは一人でやってく。せいぜい、頑張りな。

樹一郎 裏・表か。

榎田 で、新しい店長はどこから。

樹一郎 今外に出てる。

榎田 あのチビか。グッド。あんたよりいいぜ。せいぜいちゃんと再建するように引き継いでくれよ。取引金融機関に迷惑をかけず、赤字にせず、みんなに愛される写真館に。まあ、あんたそんなこと言う資格なんかねえよな。あんたが続けたら、2年後には、駐車場だからな。

榎田、写真館の車のキーを帽子掛けの高い位置から、花でも手が届く低い位置に移し、「これからはここに掛ける」と身振りで示し、にやりと笑って退場。

藤谷 驚いたわ。

樹一郎 何に？

藤谷 花ちゃんよ。今気づいた。あの子、「スマイル・ガール」だわ。

樹一郎 君まで英語か。

藤谷 違うのよ。私あの子と会ったことがある気がしてた。そうじゃなかった。写真で見てたんだわ。裁判官の間では有名な児童虐待事件なの。母親を殺人未遂に問えるかどうかで、かなり議論になったから。母親と2人暮らして、その母親がひどい暴力を振るったの。殴るける、刃物で切りつける。アイロンでやけどさせる。食事を与えず、真っ暗な部屋に閉じ込める。でも近所の人たちは全員、口をそろえて言ったの。子どもの悲鳴を聞いたことはない。知らなかったの？

樹一郎 親は死んだって聞いてた。施設で育ったって。

藤谷 保護されたときの写真が、児童虐待研究の資料写真として、アメリカのテキストに

載ったの。4歳か5歳くらいかな。栄養失調状態で、全身拷問にあったみたいに、傷だらけ。でもなぜか、すごい笑顔なの。ニコニコ。もう満面の笑み。それで「スマイル・ガール」。世界で一番有名な、児童虐待被害者の1人だわ。

樹一郎 あいつ、アイロン苦手って。

藤谷 アイロンに手を触れるのも無理でしょう。体中に無数のひどいやけど。でも全部、同じ形。

樹一郎 知らなかった。

藤谷 姉川、アフリカから帰ってきたらさ。

樹一郎 なんだよ。

藤谷 花ちゃんと結婚しなよ。

樹一郎 年、違いすぎるよ。

藤谷 (ほほえむ) 姉川、今も野球やってるの？

樹一郎 まさか。おれのせいで出場停止半年だった。甲子園も行けずに終わった。もう一生無理だよ。

藤谷 あれやってるときの姉川、かっこよかったよ。

樹一郎 見てくれてたんだ。

藤谷 見てたよ。

樹一郎 藤パン。

藤谷 すごい、そう呼ばれたの、何十年ぶりかな。

樹一郎 なんで裁判官に？いろいろ不自由だろ。

藤谷 パチンコとか行きづらいついて言う人もいるね。

樹一郎 そういうことじゃなくて。

藤谷 私？好きな男の子海外まで追いかけて、うまくいかなくて、人前でわあわあ泣くとか、そういうことは、しづらいよね。でもさ、案山子みたいでも、立つべきところに必ず立っている人間って、必要なのよ。姉川はどうなのよ。

花、戻る。

花 すみません。遅くなって。芽衣、ダメです。本当に頑固なんだから。みんな帰ったんですか。

樹一郎 仕方ないよ。

藤谷 あたしも帰るね。花ちゃん、また日程相談しよう。出張撮影してもらうかもしれない。うちの妹、すごく幽霊怖がるの。弱虫でき。プロレスラーのくせにき。

樹一郎 プロレスやってんだ。

花 送っていきます。

藤谷 きょうは送らなくていいよ。駅まで歩く。

藤谷、
去る。

花 知らなかったんですか？妹さん、人気あるんですよ。得意技はパイルドライブ
し。

樹一郎 高校の時は、おとなしかったぞ。たしか図書委員だった。

花 師匠。

樹一郎 何だ。

花 けさのお話ですが、私には7代目は荷が重いです。ただの臨時の、店長代理っ
てことでは。

樹一郎 おれはこの店、たたもうと思ってた。

花 知ってました。

樹一郎 店の前に桜の樹があるだろ。

花 ええ。4月にはすぐきれいです。

樹一郎 あそこでその女子高の生徒が記念撮影するんだ。

店の中にいると、ときどき聞こえるんだ。「とろっか、とろっか。写真とろっ
か」。おつ、客か。そう思うと入ってこない。出てみると、お互いに、「写
るんだ。ここは小さなまちで、人口は減り続けている。もうこの写真館は役割
を果たした。そう思ったんだ。
分かります。

花 高校を出るとき、ここに「雇ってくれ」って来て、うちの親父に追い出され
たんだってな。

樹一郎 あのとときは暗室に入れませんでした。

花 それなのになぜ、写真館で働きたかったんだ。

樹一郎 師匠は、どうして戦争の写真を。

花 おれは、胃カメラみたいなもんだから。

樹一郎 胃カメラ？

見たくないものを撮る人間も必要なんだよ。目を背けたくなるような。世界中
いたるところで、だれかがだれかの頭を踏みつけて、虫を食わせている。理由
もないのに。ほっとけないだろう。誰かがカメラで撮らないと。暴力をほって
おくと、暴力はいつか、後ろから近づいてくるんだ。

花 前に草二郎さんが言っていました。自分はずっと見ていたものを写真にするだ
けだ。でも兄貴は、カメラで闘っているって。

樹一郎 負けるけどな。

花 負けるなんて。

樹一郎 10年前、負けたんだ。バグダッドで。おれは勝てなかった。撮れなかったんだ。

花 撮ったじゃないですか。写真、世界中の雑誌や新聞に載ってる。

樹一郎 バグダッド空爆の、初期のころだけだ。おれが撮れたのは。あちこちで民間の建物や市場や、道路が破壊され、人々が逃げ惑ってた。おれはそんな時、撮ってなかった。急に、撮れなくなっただ。撮っても撮っても、爆撃はとまらない。圧倒的な、憎しみと、暴力。それに対するすさまじい憎しみと暴力。人は死に続ける。おれが何をしても、この連鎖は、変わらない。何をしても。そんな気持ちになった。それから、仕事ができないまま、自分の命を守るので精いっぱいだった。

花 仕方ないよ。そんなの。

樹一郎 サムライと呼ばれた。新聞やテレビが全部撤退した後も、あそこにいたから。でも誰もグッド・フォトグラファーと呼ばない。撮れなかったんだ。ひどいものを見たよ。黒焦げになったバスに残された大勢の人の死体。つり革には、たくさん عراق 人の手だけが焼け残ってた。彼らの体と離れて。つり革をつかんだまま。揺れてるんだ。風で、ふらふら。夢に出てくる。手だけなのに、唇は無いのに、話しかけてくるんだよ。カメラマン、なぜだ。撮らないのは。なぜだ。カメラはあるのに、なぜだ。今も世界中で飛行機が爆弾を落としている。人が、人を殺している。残酷な方法で。撮らないのか。おまえは、いないのか。

かあさんおばけ、登場。

花 師匠。お願いですから、無事で帰ってきて、これからも、いろいろ教えてください。さい。

樹一郎 おまえはどうなんだ。なぜ写真を撮る？

花 芽衣が言ったこと、聞いてましたよね。あたしの母の話。

樹一郎 (うなづく)

花 きれいな人だったんです。(前歯を指差し)この歯がないだけ。女優さんみたい。あたしは似てないんです。私が生まれるまで、思い通りの人生だったと思うんです。男の人がほっておかなかったって。いろんな人がきれいだって。でも私が生まれたとたん、すべてが変わってしまった。あたしがいたから。誰も寄り付かなくなっ。母はあたしにずっと言い続けたんです。

かあさんおばけ あなたはいない。

花 いつも

かあさんおばけ あなたはいない。

花 そう言いながら叩くの。包丁とか、アイロンを使うときも。真っ暗な場所に何日も

閉じ込められたときも、母さんが言うのが聞こえた。まるで呪文のようになりかえして言った。

かあさんおぼけ 電気はつかない。ドアは開かない。声は届かない。誰も助けてくれない。私も思ってた。あたしはいないんだ。いないから、痛くないし、熱くない。だって、いないんだから。母さんを苦しませたり、悲しませたりしない。だって、いないんだから。

樹一郎 花。

花 気がついたら警察にいたの。たくさんの人が周りにいて、私は裸で。「誰が君にこんなことをしたの。まさか実のお母さんがこんなことをしないよね」。そのうち、誰かがボラロイド写真を撮り始めたの。フラッシュが光る。机の上にあたしの顔が置かれる。あざだらけの顔。光る。はさみや包丁で切られたあたしの首。光る。タバコやアイロンのやけどだらけの腕。不思議なの。それを見るたびに、痛みを感じる。痛さも、熱さも。悲鳴が出そうなくらい。でもそれといっしょに、もう一つの気持ちがかみあげてきたの。それはね、うれしき。あたしはいるんだ。ここにいるんだ。だって写真に写ってる。母さん、あたしはいる。叫び出したかった。やっ、やっ、って。あたし、いるぞって。ここにいるぞって。フラッシュの中から、少しずつ、生まれてきた気がした。あたしも夢を見るの。携帯が鳴る。出たら母さんが言う。かあさんおぼけ あなたはいない。

怖くて仕方なかった。夜は携帯を切って寝てた。でもここで働き始めて、言い返せるようになったんです。「母さん、私はここにいます。写真に写るし、写真を写してる」。師匠。樹一郎さん。私は難しいことは分からない。でもあたしは、今、あたしなんだ。カメラがなかったら、きっと、そうじゃない。

樹一郎、三脚をたたんで、儀式のように花に差し出す。花は受け取る。

花 早く帰ってきてください。無事で。

樹一郎 分かった。閉店だ。(ルンバのスイッチを入れる) 実は、頼みがあるんだけど。

花 あたしに？

樹一郎 (ためらう間) おまえの写真を撮らせてくれないか。
花 (笑顔でうなずく)。

傘を持った若者1、2、3登場。若者3は若者1に向けて傘を振り回している。若者2(女性)は逃げ惑い、1は説得しようとしている。3人にかまわず、樹一郎と花は撮影を続ける。このエピソードの間に写真を撮り、2人は去る。

若者 1 ちよつと待つて。暴力はいけませんよ。暴力は世界を悲しませるものだ。世界中で悲しませてるでしょう。ベトナム、カンボジア、あさま山荘。誰かが誰かを傷つけると、必ず報復がある。憎しみが連鎖していく。それは断ち切らねば。

若者 3 わけわかんないこと言うな。

若者 1 落ち着いて聞いてください。

若者 2 あなた、もうやめて。

若者 1 僕は恋愛には写真が必要だと言ってるだけです。

若者 3 殴ってやる。

若者 1 落ち着いて。50年も立てば、違う時代が来るかもしれませぬ。テレビ電話が普及して、恋人同士が離れていても、顔を見ながら話したり、場合によってはポーズできたりする、そういう時代が来るでしょう。でも今は、1970年代です。恋人同士はお互いに写真を見ながら、週末にしか会えない相手のことを考える、恋人が自分の想像した幻ではなく、自分自身も相手の想像の中に生きる幻ではなく、互いに存在するんだ、と。存在を写真を見ながら確認する、そういう必要があるんです。愛と存在を支えるのに写真がいます。

若者 2 もうやめなさい。けがしたら大変だわ。

若者 3 それでなんで、おれがおまえらに協力しないとイケないんだ。

若者 1 履歴書に張る写真は何枚です。

若者 3 1枚だ。

若者 1 予備が必要といっても2枚ですよ。この自動撮影機、4枚撮るんです。2枚にはできない。だからあと2枚を譲っていただけませんか。

若者 3 ふざけるな。

若者 1 途中で交代する時間があります。さつきから見ると、2回目のフラッシュと3回目のフラッシュの間はどうやら4秒だ。1, 2, 3, 4。ね。1, 2, 3, 4。

素早く動けば、交代できる。

若者 3 200円。

若者 1 え？

若者 3 じゃ、金は半分出せ。

若者 1 なに言ってるんです。金があれば自分たちで撮りますよ。

若者 3 じゃおれに何の得があるんだよ。

若者 1 思いやり予算ということ。

若者 3 (泣き出す)でも、おれ恋人いないんだよ。仕事も無い。履歴書持って行って面接を受けるけど、仕事につけるかどうかわかんない。そんな人間がなんでおまえら恋人のいる人間に思いやりで協力しないとイケないんだ。

若者 1 どうしたんです。
若者 3 動けないんだ。なんか、はさまっちゃまって。

2人で、すそを外そうとするが、無理で、3回目のフラッシュが光る。

若者 3 仕方がない。3人で写そう。急げ。

若者 2 えー。

若者 1 仕方ない。来い。急げ。

若者 1、2、機械の中に飛び込み、団子状態になったところでフラッシュが光る。

3人、起き上がり、機械から出てきた写真を見て、笑ったり、握手したりしながら去る。すれ違いに松一郎、登場。じっと外を見やる。枝野、登場。

枝野 ハロウ。

松一郎 エゲレス語……枝野か。

枝野 (深手を負った様子) 拙者が勝ち申した。写真を。

松一郎 バカやろうども。おまえら本当にドドドドドって、バカだよ。結局、果たしあいをしやがったのか。やめとけばいいものを。

枝野 こちらもやられたが、切り伏せ申した。

松一郎 威張るな。おまえのやったことはただの人殺しだ。

枝野 人殺しとはなんだ。

松一郎 何度でも言ってやる。おまえは人殺しだ。

枝野 抜かすか。

枝野 刀を抜く。二刀流なので、両刀抜く。

松一郎 切るのか。丸腰のおれを切るのか。そんなことをするやつは、武士どころか、人じゃねえぜ。人じゃねえのか。おまえ、獣か。

松一郎は三脚をつかんで刀代わりにかまえる。枝野は深手を負っており、構えが少しずつ崩れていく。その様子は、傷ついた鳥が必死ではばたいているように見える。

枝野 ノー。

枝野、倒れる。

松一郎（傷を見て）相打ちか。これは助からねえぞ。このバカ。意味ねえじゃねえか。枝野（ルンバを見て）やはりここは奇妙な虫がいるな。

松一郎 だめだ。死ぬんじゃない。ここは人が死ぬ場所ではないぞ。いつか死ぬ人の姿を生きたままとどめる場所だ。いつか散り行く桜を、咲いたままとどめる場所だ。起き得ないことが起きる場所だ。死ぬ場所じゃねえ。

重次郎、息絶える。音楽。

松一郎 人が死ぬ場所じゃねえ。季節のとどまる場所、命のとどまる場所だ。何やってんだ、おまえら。

松一郎、両手を差し上げる。

松一郎 が、が、が。

ヘリコプターのプロペラの音。複数の爆発音。プロペラの音が大きくなる。

溶暗

第4場・冬

「ルンバ」は動いていない。写真館の中に何枚か、コンサートや朗読劇のポスターやチラシが貼ってある。花とかあさんおばけがいる。花が座り込んで泣いている。かあさんおばけがうしろから見つめている。

かあさんおばけ 花

花、立ち上がって振り向く。かあさんおばけ、ほほえんで、小さなカメラで花を撮影する。

花 母さん。

かあさんおばけ、手を振って去る。花、涙をふきながら、羊羹を取り出して、チョコレートバーのように上からかじって食べ始める。草二郎登場。冒頭の花の位置に立ち、解説を始める。花は後ろから、食べながら見つめる。

草二郎 初代姉川松一郎の撮影した写真の中でこれだけがなぜ写真館に残っていたかも不明です。当時の記念写真は1人で写すか、あるいは大勢で撮影することが多く、武士のツーショット写真というのは非常に珍しいそうです。二代目の葉一郎、三代目の柳一郎、四代目の茂一郎、五代目の竹一郎です。彼らは仮装、今でいうコスプレをしています。40歳の誕生日に、必ず仮装して写真を撮ると決めていたそうです。扮しているのは、それぞれ、ルイ14世と思われるナゾのフランス人、ウイリアム・シェイクスピア、エルビス・プレスリー、森光子さんです。六代目の樹一郎だけは、写真がありません。みなさんがご存知のとおり、樹一郎はソマリア内戦の写真を撮るために昨年末にアフリカに渡りました。そして戦鬪に巻き込まれる恐れが出てきたので、エチオピアに退避するという1カ月前のメールを最後に、連絡が取れなくなりました。現在も行方は分かっていません。そして（絶句）鶴の台座（絶句）ダメだね。

花 ダメじゃないわ。途中まですごく上手だったよ。できるよ。

草二郎 こんなこと、必要な。

花 せっかく芽衣たちが観光コースにこの写真館を入れてくれたんだから。観光客には店長が説明しなきゃ。あとで芽衣が来るから、あの子にも見せてもらうね。

草二郎 えー。そもそもおれには店長は無理だよ。バーンバーンに無理だよ。

花 音でしゃべらないで。

草二郎 花ちゃんも変な食べ方やめなよ。羊羹はそうやって食べるもんじゃないよ。

花 樹一郎さんみたいな言い方。

草二郎 兄貴は店長を花ちゃんにやってもらおうって。

花 あたしはダメ。

草二郎 どうして。

花 写真撮るたびに樹一郎さんのこと、思い出すでしょう。嫌だ。死んだ人のこと考えながら、ここで一生過ごすなんて。

草二郎 死んだとは、まだ分からないだろ。

花 死んでるよ。

草二郎 パソコンの故障かも。

花 死んでるって。生きてると思って待ち続けて、死んだって聞かされたら、あたし耐えられない。死んだって思う方がいいの。

草二郎 どうしても、出て行くのか。

花 就活、就活。ここは嫌。

草二郎 写真好きなのに。

花 別の写真館探すよ。あたしは、写真撮るとき、親指立てたいの。

草二郎 親指。

花 やったねって、こう（親指を立てて見せる）。小学校入学、（親指を立てて）おめでとう、よく育ったね。結婚式、（親指を立てて）おめでとう、めでたくゴールインだね。金婚式。（親指を立てて）おめでとうございます、よく我慢した。赤ちゃん。（親指を立てて）生まれてきてくれて、ありがとう。でも、ここで撮ると、もう親指立てられない。樹一郎さんの声が聞こえる。顔を思い出す。涙が出てくるよ。写真館って、そういう場所じゃない。あたし、ここでは、だめだわ。

草二郎 おれも自分の仕事があるんだ。ここ続けるのは無理だよ。

花 樹一郎さんもそう言いたかったでしょうよ。お父さんが亡くなった時にね。

草二郎 兄貴は長男だ。

花 お父さんは草二郎さんに継がせるつもりだった。

草二郎 なんだって。

花 そうじゃない？芽衣と、ここで写真を撮ってもらったことがあるの。前に話したわね。お父さんは言ってたわ。跡継ぎは、今、鯨を撮るために船に乗ってるって。樹一郎さんの撮った写真は全部上に撮影順にファイルしてあるの。あたし見たの。鯨の写真は1枚もなかった。鯨を撮ってたのは（草二郎を指差す）。

草二郎 （間）兄貴が写真展を開いたんだ。親父と見に行った。親父は言った。おまえの兄貴の写真はピントが合ってたねえ。

花 敵しい人だったから。

草二郎 でも言うんだ。ピントは合ってたねえ。絞りも適切じゃねえ。だが、あいつの写真からは声が聞こえるって。

花 声が聞こえる。

草二郎 「腹が減った」「なんでこんなことになるんだ」「世界はなぜおれたちに冷たいんだ」。写ってる人たちが話しかけてくる。その声が耳から離れなくなる。こういう写真を撮れるやつは、撮り続けなくちゃいけない。

写真館の写真はおまえが撮れ。おまえはピントが合わせられる。でもそれだけだ。兄貴みたいには撮れねえ。

そのあと、急に死んだんだ。おれは黙ってた。親父がどう思ってたか、おれが黙ってればだれにもわからない。おれは嫌だったんだ。おれを認めてもくれない親父の跡を継いで、ここで撮り続けるなんて。考えただけでゴゴゴゴって来たんだ。兄貴がはばたいているのに、おれはここで息を潜めてるなんて。親父の通夜で、兄貴が「おれがここを継ぐ」って言い出したとき、どんなに驚いたか。どんなにほっとしたか。でも、どんなに心苦しかったか。

花 それで今回の。

草二郎 ひどいことをしちゃった。

花 草二郎さんのせいじゃないわ。でも、ここの店長はやってよね。あたしに押し付けなごで。

芽衣、登場。

花 芽衣。

芽衣 表で近所の子どもたちがすごい雪だるま作ってるわ。記念に1枚撮ってあげて。

草二郎 あ、行って来るよ。

カメラを持って飛び出していく。

花 そういのは、草二郎さんの方が向いてるのよね。樹一郎さんと子どもがみんな泣いちゃうから。顔が怖くてさ。

芽衣 花、お葬式来てくれてありがとう。

花 芽衣ママ、きれいだったね。

芽衣 謝りたくて。ここで写真撮っとけばよかった。

花 もういいのよ。

芽衣 花、ここやめるって本当？

花 うん、就活始めたところ。

芽衣 店長さん帰ってくるかもしれないじゃん。

花 死んでるよ。

草二郎、戻る。

草二郎 せっかく撮ったのに雪玉ぶつけられた。ガキども。

花 樹一郎さんなら、ぶつけ返してる。

草二郎 兄貴なら、そもそも子どもらはこんなところに雪だるま作らないよ。顔怖いから、（間）。花ちゃん、花ちゃんがどっか行っちゃまって、兄貴がもし帰ってきたら、おれどう言えればいいんだろ。

花 私は死んだって言って。

草二郎 なんて。

花 いいの。私は死んだって。

芽衣 花、観光協会に戻ったら。

花 「あかにゃんこ」に入って踊る気分じゃないもん。他の写真館探すんだ。

芽衣 ここ、せっかく観光コースに入ったのに、ツアーのお客さんにだれが説明するの？

花 草二郎さんが練習中。やってみて。

草二郎 えっ。

芽衣 見せてください。見たいな。

草二郎 ようこそ、「姉川写真館」へ。この写真館は全国で現在も営業を続けている中で、もっとも古い写真館の一つです。創業は1866年、実に江戸時代にさかのぼります。（壁に並べられた5枚の写真の中で左端の写真を指し）これが初代の姉川松一郎です。この2人の武士の写真は、写真館で撮影されたもっとも古い写真です。武士のツーショット写真というのは非常に珍しいそうです。二代目の葉一郎、三代目の柳一郎、四代目の茂一郎、五代目の竹一郎です。彼らは40歳の誕生日に、必ず仮装して写真を撮ると決めていたそうです。扮しているのは、それぞれ、ルイ14世ともいわれるナゾの王様、ウイリアム・シェイクスピア、エルビス・プレスリー、森光子さんです。現在の当主である六代目の樹一郎だけは（絶句）鶴の台座（絶句）兄貴……

花 頑張れ。

草二郎 おれのせいで。

花 そうじゃないよ。

草二郎 やっぱり、おれじゃダメだよ。おれはいつもピントがずれてるんだ。他の人と違うんだ。携帯を切るタイミングが悪くて、葬式とか通夜とかコンサートの最中には必ず鳴るし、そう思って電源切ったら、大事な電話とかメールを受け損なうしき。（スマートフォンを取り出して見る、間）

花 どうしたの。

草二郎 兄貴から電話だ。

花、芽衣 えっ。

芽衣 いっ？

草二郎 今さっき。メールも来てる。

芽衣 無事なの。

花 生きてた。生きてた。

草二郎 パソコンだ。スカイプ立ち上げてくれてる。

花、パソコンに飛びついて電源を入れ、インターネット電話用のヘッドホンをつける。

花 もしもし、もしもし。聞こえます。聞こえます。無事なんですか。けがしてない？映像？あ、映像も出ました。

赤い光が、パソコンから出て写真館を貫く。音楽。

芽衣 アフリカの、どこかのまちで、夕焼けの光が窓を恐ろしいほど赤く染めていた。そ

こは病院なのだろう。金属の組み立て式のベッドの上で、シルエットのようになっていた男がカメラを見つめている。よく見ると足と手に包帯。顔にもばんそうこうを張っている。傷ついた鳥が巣でうずくまっている様子を思わせたが、日焼けした顔が笑みを浮かべているのも分かった。はるかアフリカの地から、アデイス・アベバのまちから、大陸をいくつも超えて、その映像は鳥のように、雪の積もった彼のふるさとまで飛び、私たちの前で翼をたたもうとしていた。

花 足、大丈夫なんですか。えっ。そうなんですか。(草二郎に)地雷が近くで爆発したんですって。けがしたみたい。命は大丈夫だけど。このポスターですか？見えます？(インターネット電話用のカメラを外してポスターに近づける)侍も写した老舗写真館がコンサート会場になったっていうのが、テレビニュースとかになっちゃって。ミニコンサートや朗読劇に使いたいって、申し込みがたくさん。ええ。そうです。こっちは大雪です。子どもたちが店の前に雪だるまを作って。え、壊すんですか。そんな、ひどい。帰国はいつになりますか。そうですか。(芽衣に)来週帰ってくるって。(電話に)あ、あたし、すごくうれいす。え？大事な話？

芽衣 外そうか、私たち。

花 ちよっと待って、ここにいて。(電話に)分かりました。ちよっと待って。

花、後ずさる。このときにルンバに触れ、ルンバが動き始める。松一郎、竹一郎、若者2、若者3、三木、枝野が姿を見せる。かあさんおばけ、それまでとは違う、卒業式に出るようなきつちりした格好で姿を見せる。音楽。

花 どうぞ。聞こえます。どうぞ。いいから、話して。聞こえます。聞こえます。えっ。(間)

草二郎、芽衣、顔を見合わせる。

花 私、自分の子どもを虐待するかもしれません。

芽衣 花は大丈夫。

草二郎 みんな見てるから。

若者3 人類は進化してる。

枝野 グッド。

若者2 万博で月の石を見たわ。

松一郎 (ポスターを見て)音楽会だと。撮影局で。

若者3 写真の発明者で、月のクレーターになってない方だけどさ。

竹一郎 ダゲールだ。L・J・M・ダゲール。

若者3 オペラ座の美術監督だった。

松一郎 だからなんだってんだ。

若者2 音楽好きだったのよ。

竹一郎 私はテレビが見たいな。

三木 (花に) 返事をしてはどうかな。

若者2 繰り返されてきたことがすべて、これからも繰り返すわけじゃないわ。

松一郎 この世は、鎖じゃねえ。

枝野 (ルンバを見て) やはりここには変な虫がおるの。

若者2 (花に) みんな見てるから。

花 いいえ、樹一郎さん。待たなくていい。帰国してからなんて言わないで。切らないでください。切らないでください。(怒鳴る) 切るな。(普通の口調に戻り) 今、返事します。大丈夫ですか。私のこと見えていますか？声は聞こえますか？。樹一郎さん、私、今、返事できます。

間。みんなが花を見る。

花 イエス。

溶暗。

幕。

【参考文献】

- 私のフォトジャーナリズム(長倉広海) 平凡社新書
レンズがとらえた幕末の日本(岩倉哲典) 山川出版社
完訳ダゲレオタイプ読本(L・J・M・ダゲール) 朝日ソノラマ
光る壁画(吉村昭) 新潮文庫
幕末・明治のおもしろ写真(石黒敬章) コロナ・ブックス
写真館のあゆみ・日本営業写真史(日本写真文化協会)
アンソニー(茂市久美子) あかねブックライブラリー
田辺写真館が見た昭和(田辺聖子) 文春文庫
ユーロが危ない(日本経済新聞社) 日本経済新聞社
小暮写真館(宮部みゆき) 講談社
商店街はなぜ滅びるのか(新雅史) 光文社新書
商店街再生計画(三浦展、神奈川大学曾我部昌史研究室) 洋泉社

